

北欧の公共図書館と子どもを対象としたサービス・子育て支援 (注1)

筑波大学図書館情報メディア系教授 吉田 右子

目 次

1. おしゃべりと飲食ができる図書館
2. デモクラシーコーナー
3. にぎわいと静寂のバランス
4. 図書館の四空間モデル
5. 地域再生の立役者としての図書館
6. 図書館における子ども・子育て支援
7. 文化的な不平等を埋める空間
8. 日本の公共図書館の課題

(注1) 本稿は、株式会社日本総合研究所が吉田右子氏を招いて、2022年1月20日に開催したオンライン勉強会の内容を掲載したものである。吉田氏の許可を得て編集し、すべての文責は株式会社日本総合研究所にある。

1. おしゃべりと飲食ができる図書館

私が最初に北欧の図書館に行ったのは2000年代半ばのことだったんですけども、最初に図書館に行ったときに大変衝撃を受けました。図書館でみんな自由におしゃべりをしていたからです。おしゃべりしていただいても十分ショックだったんですけども、静かに勉強していた隣の人がいきなりランチを広げて食べ始めたんですね。食べ終わったら、またそれをしまっ、そのまま勉強を続けている。日本ではほとんどの図書館は飲食禁止、おしゃべり禁止ですから本当にびっくりして、いったい北欧の図書館はどうなっているのだろうという関心から研究を始めました。

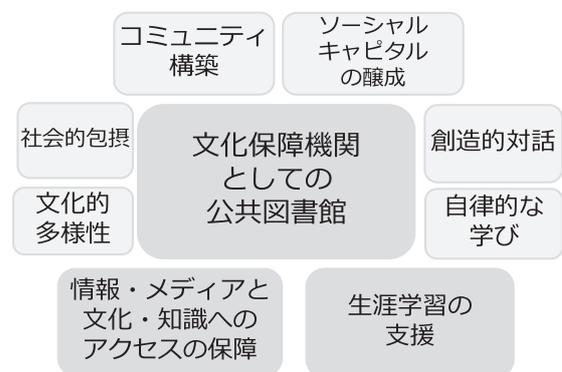
今日は図書館らしくない図書館の話がたくさんするので、まずは最初に図書館の基本的な役割をここで確認しておきたいと思います（図表1）。公共図書館はコミュニティの構築、ソーシャルキャピタルの醸成、創造的対話、自律的な学び、社会的包摂、文化的多様性など様々な役割を果たすことができますが、一番重要なのは、情報とメディア、文化、知識へのアクセスを保障すること。それらを保障することによって、生涯学習の支援をする機関である。それが基本なんだということを踏まえてお話をしていきたいと思います。

日本の図書館では、「しずかに」という貼り紙とか掲示を館内でよく見かけるのですが、恐らく北欧の人がそうしたポスターを図書館で見たら、ものすごくびっくりしてしまうと思うんですね。携帯電話の通話や、あるいはおしゃべりすること、飲食すること、これらは北欧の公共図書館では禁止されていません。例えば図書館の雑誌コーナーでレシピを見て、「あ、これは今晚のおかずがいいな」と思ったら、その場でスマホを取り出し家族に電話し、「冷蔵庫の中にお豆腐ある？」とおしゃべりすることが可能です。あと、コンピューターゲームがない図書館は皆無ですので、本を見るのに飽きたら、コンピューターゲームで遊ぶことも可能だったり、とにかくいろいろなことができるのが北欧の公共図書館です。

この図は公共図書館を構成する六つの要素を挙げています（図表2）。「文化的刺激と知的緊張感」、「他者との会話と自己との対話」、「問いを創ると答えを得る」、この六つが全部そろって、やっと図書館は役割を果たすことができた、利用者は十分図書館を使えたということになると思うんですね。

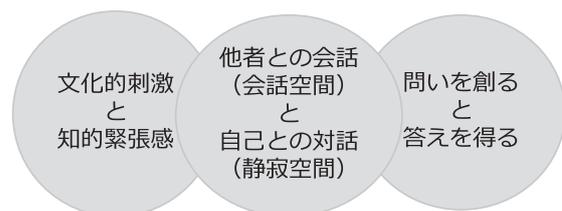
日本の公共図書館は、図表2の三つの円の下の部分には十分満たしています。つまり、図書館に行くと知的緊張感が得られる。静かだから自分としみじみと対話をする。答えを得ようと思えば、図書館の情報を探すなり司書に聞くなりして答えを得ることもできる。でも、前の三つ

（図表1）公共図書館の基本的役割



（資料）吉田右子氏作成

（図表2）公共図書館の3×2の要素



（資料）吉田右子氏作成

「文化的刺激、他者との会話、問いを創る」に関してはどうなのだろう、というのが私の問いかけになります。そのことについて、これから写真を見ながら確認していきたいと思います。

北ヨーロッパ、オランダも含めて、北欧の公共図書館は、基本的には図書館と公民館が合わさった施設とだけ思えば、これからお話しすることはそれほど驚く内容ではなくなります。若い世代だと公民館を知らない方もいらっしゃるかもしれませんが、市民センターとか、住民交流センターとか、地域にあって誰でもアクセスできる公的な文化的拠点を思い浮かべていただいたうえで、北欧の図書館 = 図書館 + 公民館というふうに考えてください。

例えばこれはオランダの図書館の写真ですけれども、書架の隣に健康づくりのために漕ぐエアロバイクが置いてあります（図表3）。図書館に行って本を読みながら健康づくりもしちゃおうみたいな、そういう発想は公民館だとあまり違和感もなさそうです。ですがオランダでは公共図書館にエアロバイクが置いてあるのです。

図書館ではおしゃべりOK、飲食自由なので、館内にはカフェがあります。この写真は、本当にごくごく小さい図書館なんですけれども、何を皆さんに伝えたいかという、書架があって、すぐ隣に自動販売機があるという点です（図表4）。

（図表3）図書館の一角に置かれたエアロバイク



（資料）吉田右子氏撮影

（図表4）書架のすぐ傍に設置されたコーヒーの自動販売機



（資料）吉田右子氏撮影

北欧だと飲料の自動販売機の定位置というのは書架の真隣です。というのは、本を読みながらコーヒーを飲むことができるからなんですね。さらに小さい図書館、団地の一角にある公共図書館では、恐らく自動販売機を設置する予算がないのでしょう。だけれども、わざわざ司書の方が毎日毎日コーヒーをポットに入れて用意して、クリームとお砂糖もちゃんと置いてある（図表5）。100円足らずでしっかりと濃いコーヒーがちゃんと出てきて、すごくおいしいコーヒーが飲めるのです。

とにかくコーヒーと読書はセットになっていて……そうになると、なぜ、日本では飲食を禁止するのかというのがだんだん分からなくなってきますね。1番の懸念は、飲み物をこぼしたらどうしようかということです。図書館では恐らく図書の汚損を一番恐れているのですが、よく考えてみたら、図書館から借り出した本を多分、利用者はお茶を飲みながら読んでいますよ。一緒にお風呂に入って出てきた

よくくたびれた本を返してくる人もいます。そういう意味では、館内で飲食を禁じるということは全く意味のないことですが、何か神話化された掟のようなものがあり、それを一生懸命守っているという感じがします。

(図表5) 司書が準備したコーヒーセット



(資料) 吉田右子氏撮影

2. デモクラシーコーナー

おしゃべりといえば、これはデンマーク・コペンハーゲンの図書館で15年ぐらい前に撮った写真です(図表6)。「デモクラシーコーナー」という垂れ幕がかかっています。ここは、政治家やコミュニティの代表者、NPOの人たちが来て、住民と直接対話するコーナーです。このコーナーは陽もよく当たる特等席にあって、おもしろいのは、普通、私たちが政治家に会おうとすると、こちらからアポイントメントをとって、いついつにお願いしますみたいな感じで出かけていきますよね。そうではなくて逆で、政治家とか住民の代表が日を決めてここにいて、住民がしゃべりたかったらしゃべりに来る。

とにかく住民主体で住民がしゃべりたいと思ったときに行けること、そこでは何でも自由にしゃべっていいのです。人気のない政治家だったりすると、誰もしゃべりに来なかったりして、すごく寂しい思いをするかもしれません。でも、真後ろに本があるので、格好がつくというか、本を読んでいると、誰も来なかったとしてもそんなに気まずい思いをせずに、ああ、図書館でいい時間を過ごしたなという感じで帰っていただけますよね。デモクラシーコーナーが図書館にあるというのは本当にいいと思うんですね。

私がこの仕組みを見たのはデンマークですけども、その後、いろんな国に広がって行って、今、一番熱心に政治家との対話空間作りに力を

(図表6) 閲覧室のデモクラシーコーナー



(資料) 吉田右子氏撮影

入れているのはノルウェーです。ノルウェーは皆さんご存じの通り、政治的な関心がきわめて高い国で、何が趣味ですかと問われると「選挙に行くこと」という回答が返ってきそうな国です。とくに高齢者は選挙に行くことを楽しみにしていて、自分が政治参加することにとっても意識的な国なんですけれども、ノルウェーでは市長が月1回、図書館に来て対話するイベントをいくつかの自治体で行っていると聞きました。デンマークの「民主シーコーナー」の拡張版ですね。ほんとに図書館らしい、いいプログラムだなと思っています。

3. にぎわいと静寂のバランス

次は、コンピューターゲームの話です。これまで100館以上の図書館を訪問してコンピューターゲームを置いていないところはたったの2館だけでした。館長のポリシーによって置かないと決めた2館だけで、他の図書館には必ずコンピューターゲームがありました。館内で遊ぶこともできますし、館外貸出もします（図表7）。ちなみに、絶対にコンピューターゲームを置かないと言った図書館の館長の一人は30代半ばの若い館長で、自らを熱心なゲーマーと称して、新作が出たら必ずクリアするまでプレイするという人だったのですが、「自分の図書館にはコンピューターゲームは置かない。図書館にコンピューターゲームは馴染まないと思う」と言っていました。でもそうした図書館は本当に稀で、コンピューターゲームは北欧公共図書館のマストアイテムです。

（図表7）貸出用コンピューターゲームと館内プレイ用のコンピューターゲーム機器



貸出用



館内プレイ用

（資料）吉田右子氏撮影

今までお話ししてきたように、図書館では割と話し声がよく聞こえる状況になっています。ですので静かに本を読んだり勉強したい人は、「静寂コーナー」と呼ばれる場所でゆっくりと静かに本を読んでいたりするんですけども、どちらかというと「図書館で静かに一人で本を読むなんて変わっているね…」、そんな感じに受け止められていると思います（図表8）。

1階はおしゃべり自由で、2階はちょっと静かにしましょうね、といった分け方をしているところもあります。これはオランダのチーズで有名なゴータの図書館ですけども、2階は静寂が保たれていて、読書をしている人もいるし、仕事をしている人もいるという感じで各自が落ち着いて図書館での時間を過ごす、そんな空間になっています（図表9）。

(図表8) 静寂コーナー (デンマーク)



(資料) 吉田右子氏撮影

(図表9) 静寂コーナー (オランダ)



(資料) 吉田右子氏撮影

北欧の図書館の特徴と言えるのですけれども、「オープンライブラリー」という制度があります(図表10)。これは職員不在のときでも使える図書館制度なんですね。最初のきっかけですが、デンマークの本当に小さな村で、図書館が財政難で閉鎖しなければならない状況に陥ったときに、「閉鎖をしないでほしい」という住民の声が上がりました。職員は置けないので、住民の人たちで自由にといいか、自律的に使ってくださいということになって、実験的に「オープンライブラリー」が導入されました。

大学図書館や企業の図書館ではすでに導入されていますが、IDカードと暗証番号で入館し、自分で電気をつけて資料を使ってまた元通りにして帰っていく、つまりセルフサービスで図書館を使う仕組みです。最初この実験的な試みがなされたときには、さすがに超楽観的なデンマーク人でも、何か起こるんじゃないか、よからぬことをする人がいるんじゃないかというふうに心配したようです。でも、ふたを開けてみたら、そういう悪しきことがほとんど起こらなかったのです。導入された地域が小規模で住民はみんな知り合いみたいな、そういう感じの村だったんですね。だから、何も起こらなかったという結論になったのですけれども、これをいろんな都市に広げていっても、そこでもやっぱり何も起きなかったのです。もちろん、やんちゃなティーンエイジャーはどこにでもいますので、いろんなものを蹴飛ばしたり、器物損壊に近いことは、ちょっとはあったかもしれないけれども、それでもほほないといい状態だったのですね。

結局、デンマークという国が世界でも社会信頼度が飛び抜けて高い国であった。だから、こういうことが成功したのだという結論に至り、デンマークから今や北欧諸国全体に広がり、オランダにも広がりということで、この仕組みの発祥国デンマークではほとんどの図書館でこのオープンライブラリーを導

(図表10) セルフサービスの時間帯に図書館を使う利用者



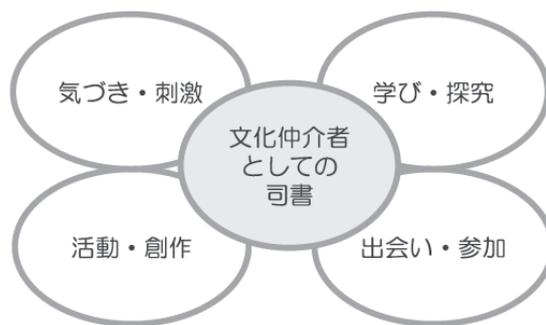
(資料) 吉田右子氏撮影

入していると思います。通常の開館時間が例えば9時から17時だとしたら、開館前、開館後の時間に自由に図書館を使えるということですね。

4. 図書館の四空間モデル

ここまでデンマークの図書館の話をしてきたんですけれども、このようにフレキシブルな図書館を「四空間モデル」という名称を付けてモデル化した研究者がいます(図表11)。今からそれをお話ししていきたいと思います。四空間モデルは、図書館が文化的な刺激を受ける場所であり、何かを創り出す創作活動の場であり、学びの場であり、出会いと社会参加の場であることを示しています。公共図書館が四空間モデルで示された四つのそれぞれ異質な機能を果たすことができるのは、そうした機能を橋渡しする司書がいるからです。北欧では司書は自らを文化仲介者と名乗ります。文化仲介者としての司書が、この四つの多様な機能を一つに結びつけるという、そういう構図になっています。

(図表11) 公共図書館の四空間モデル

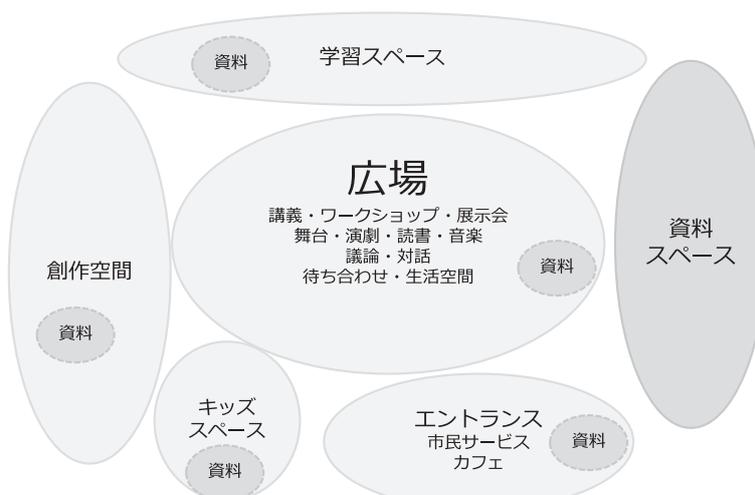


出典：Jochumsen, Henrik.; Rasmussen, Casper Hvenegaard; Skot-Hansen, Dorte. The four spaces - a new model for the public library. *New Library World*, 2012, vol.113, no.11/12, p.589
Figure 1 に基づき筆者作成

(資料) 吉田右子氏作成

デンマーク文化省宮殿文化局は四空間モデルを、実際の空間に落とし込んだ例を示しています(図表12)。まず図書館のなかの広場と呼ばれるところが一番大きいスペースです。先ほどお話しした政治家が来て住民と対話するためのスペースも広場に置かれますし、ワークショップを行ったり、コンサート

(図表12) 21世紀北欧公共図書館の空間実態



出典：文化省宮殿文化局「図書館のスペースとゾーニング」を改変し作成
<https://modelprogrammer.slks.dk/en/challenges/zones-and-spaces/>

(資料) 吉田右子氏作成

を開催したり、待ち合わせをしたり、いろいろなことができるメインのスペースになっています。

図書館なのでもちろん書架がたくさん並んでいる資料スペースや学習をするスペースがありますが、それに加えて創作空間があります。創作空間というのは新しいスペースかなと思うのですが、文字通り何かを創るための空間です。キッズスペースは、世界中どこの図書館に行ってもあり、100年以上前から変わらずに図書館のなかに確保されてきました。エントランスにはカフェや役所の出張サービスが置かれたりしています。日本だと、市町村の出張所はデパートやショッピングモールなどの一角に置かれることが多いのですが、北欧では住民が1番アクセスしやすい図書館に置かれています。免許証やパスポートの更新とかそういう手続きも全部、図書館の市民サービス出張所でできることになっています。

興味深いのは、今、北欧の図書館では資料スペースがどんどん縮小化されていることです。建築事務所で働いている方から図書館をリノベーションするときは書架の数を減らしますと聞いたことがあります。図書館なのに、本を少なくしますと言う。その後、多目的空間を実現しているいろいろな図書館を見て「ああ、そういうことなのか」と、やっと腑に落ちたということがありました。

デンマークの図書館業界誌で、図書館のリノベーション計画に関する記事を見つけました。それを見るとまず壁があまりないんですね。いろいろなコーナーをつくることによって、複数の機能を果たせるようになっています。また壁がないため全体的に、にぎやかな空間になります。先ほど四空間モデルをお話ししましたので、それぞれの空間でどういうことが起こっているのか、簡単にご紹介しておきたいと思います。

まず、文化的刺激としての図書館ですけれども、例えば高齢者を対象としたプログラムとして、図書館を出て森のなかで読書会をしましょうとか、そういう結構おもしろい試みをしています。地元の団体とコラボレーションして、図書館単体ではできないプログラムを実施します。また地元のアーティストを支援するために図書館で作品を展示することもあります。

創作活動の場ですけれども、北欧は小説家とか詩人とか漫画家などのアーティストと図書館の距離がすごく近いんですね。アーティストの人たちは図書館に来るのをとても楽しみにしていますし、割と小さな図書館であっても著名な小説家が来館します。そして利用者は小説家と一緒に文学作品をつくったり、文章作りのワークショップに参加したりできます。創作は文学に限られません。冬の定番としては編み物カフェというのがあって、図書館に来てみんなで一緒に編み物をする。ただそれだけですけれども、図書館という場所は雰囲気もいいし、クリエイティブなイマジネーションが湧くということで、ニッティングカフェは冬の人気プログラムです。

学びの場ですけれども、現在はとくにIT支援に力を入れています。ITスキルに問題を抱える住民の支援サービスは全面的に図書館が担っています。出会いと社会参加ということ言うと、移民難民へのサービスはその代表です。文字通り身一つで北欧にたどりついた人たちにどういったサービスができるのかということは、21世紀の図書館の最大の課題ですし、これまでにいろいろなサービスを試行してきました。後半でまた触れたいと思います。

5. 地域再生の立役者としての図書館

ここからは実際の図書館を事例に、図書館が実際に行っている多様なサービスを見ていきます。この

写真はデンマークのコペンハーゲンにある「レントメストラヴァイ図書館（Rentemestervej Bibliotek）」です（図表13）。コミュニティ再生に貢献した公共図書館として有名です。

実は、この図書館があったところは、私がデンマークに長期滞在していたときには非常に危険な地域で、昼間でもこの地域には行ってはいけないと言われていたぐらい治安が悪い場所でした。ただ、そんな危ない場所でもそこに住んでいる人がいるわけで、何とかしたいと考えて、地域再生の立役者として選ばれたのが図書館でした。図書館を中心にコミュニティを立て直しようということで、住民が主体になっているいろいろとアイデアを出しあって複合文化施設である図書館を作り上げていきました。

まず、外壁はデンマークでは若者中心にとっても人気があるグラフィティ・アーティストに頼みました。このユニークな外観によって、住民は図書館により親しみやすさを感じて、図書館に来る時の気持ちの面でのハードルがかなり下がったと思います。

それで、中に入るとカフェがまずあります。デンマークは図書館のなかにカフェを入れるときには、チェーン店は選びません。なぜかという、チェーン店は自然に増殖していきます。そしてそのことによって存在を脅かされているのが、古くからある街のカフェです。これは図書館の話とちょっとずれるのですが、ヨーロッパでは街の作りがはっきりしていて、どこの街にも旧市街と呼ばれる昔からの街の中心部があるのですけれども、そこにはチェーン店を入れられないというふうに決めているコミュニティもあったりします。要するに、古くからあるカフェを守らなくてはいけない、そういう思想なんですね。

だから図書館もチェーン店を入れるということはせずに、図書館らしいカフェを入れましょうという考え方をします。この図書館の場合は、「ハッピー・ファウンデーション」という企業のカフェを誘致しました（図表14）。この企業はユニークな活動で知られています。障害者が楽しめるテレビ番組がないため、デンマークで初めて障害者向けのテレビ局をつくりました。それが非常に成功して、次は何をしたかという、障害のある子どものための動物園をつくりました。それで、今はカフェなどの食産業に力を入れています。図書館に誘致したカフェでは、知的障害者を雇用して職業訓練を行っています。カフェの料理を作っている人もサーブする人も知的

（図表13）地域再生の中心となった図書館



（資料）吉田右子氏撮影

（図表14）図書館のカフェで新聞をゆっくり読む住民



（資料）吉田右子氏撮影

障害者です。このカフェはほんとに居心地がよくて、気がついてみると3時間経っていたという経験をしました。このカフェが図書館に入ってすぐのところにあります。

そのカフェ側から見てすぐ真正面には、いわゆる児童室があります。児童室は「洞穴」と名付けられて、デンマークにしては珍しく靴を脱いで入るようになっています。子どもたちがちゃんと靴をそろえられるように、靴を脱ぐ場所にマークまで描いてあるのが微笑ましいです。児童室の内部は写真のようになっていて、書架がないんですね（図表15）。書架ではなくカラーボックスのなかに、いっぱい本が入っています。子どもたちは本を見るよりも、まずカラーボックスによじ登って遊びます。でも子どもたちが危ない行動をしたら即座に制止できるぐらいの距離感のところにカフェがあって、親御さんたちはそこでくつろぎながら子どもたちの様子を見守ります。週末のランチはすごくおいしくて大人気だそうです。

これはティーンエイジャーのための空間です（図表16）。私が訪問したのは午前中だったので、子どもたちはいなかったのですが、午後になるとこの大テーブルが全部いっぱいになります。何をするかというと、ここで友だち同士、宿題をやるんです。デンマークでは宿題はひとりではできません。ドリルを解くとかではなく、チームでやらないといけない宿題が出るので、結局、みんなでわいわいと、時には司書に聞きながら宿題をやるしかないのです。ですので、大テーブルが部屋の中心に置かれているのです。

おなががすいたらおやつを食べてもいいし、ランチを食べるのを忘れた子はここで食べてもいいし、飽きちゃったらテレビゲームで遊んでもいいし、という感じで午後中過ごしていますね。

これは、移民難民のためのコンピューターのあるコーナーです（図表17）。この図書館にはミシンのある工房もあります。なぜ、ミシンが図書館にあるのかということですが、図書館の利用者にはムスリム系の住民が非常に多いんですね。ムスリム系住民の家庭には子どもが多く母親が子どもたちの服を縫うために、年会費が700円ぐらいだったと記憶していますがメンバー会員になってミシンを借ります。ミシンを買うとなるとすごく高いのですが、図書館ではそれを安い料金で借りられるという、そういう仕組みだそうです。

（図表15）児童室の様子



（資料）吉田右子氏撮影

（図表16）ティーンエイジャースペースにある大きなテーブル



（資料）吉田右子氏撮影

(図表17) 移民難民のためのコンピューターコーナー

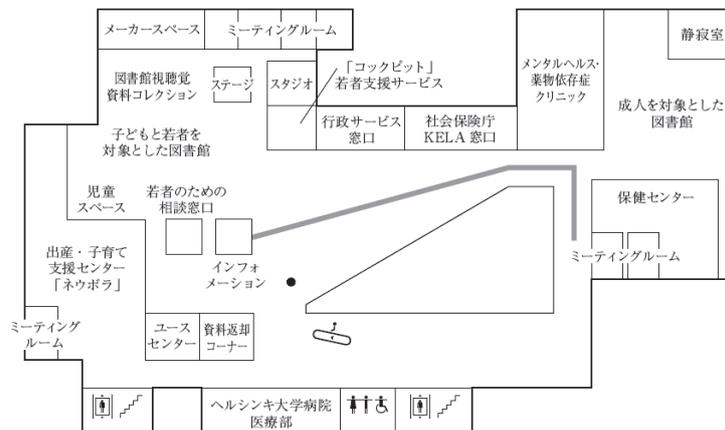


(資料) 吉田右子氏撮影

6. 図書館における子ども・子育て支援

次に、フィンランドの図書館の事例を見ていきたいと思えます。今からご紹介する「イソオメナ図書館 (Ison Omenan kirjasto)」は「住民サービスを一つの屋根の下で」をモットーに、実にいろんな機能がたくさん盛り込まれた複合施設になっています (図表18)。ただし「図書館が中心となった」複合施設であるところが、この施設を見るうえでのポイントなのかなと思えます。

(図表18) 図書館が中心となった複合施設



出典：吉田右子・小泉乃乃・坂田ヘントネン亜希『フィンランド公共図書館：躍進の秘密』新評論、2019、p. 104

(資料) 吉田右子氏作成

これは子どものためのコンピューターゲームコーナーの写真ですけれども、子どもたちだけでプレイしないように結構気を使っていて、真ん中に立っている男性が司書ですね。この人が子どもたちを見守っています (図表19)。

司書は、世界のどこの国でも専門資格ですし、司書養成カリキュラムにおいて児童サービスというの

は必須なんですね。どこの国の司書でも、子どもが来たらどのように対応するのかについて専門知識を持っています。さらに図書館には司書以外の専門職の人のほうが多いのではないかと思うぐらい、いろんな人がいます。例えば週1～2回、子ども専門のカウンセラーが巡回しています。一つの図書館に来るのは週2回ぐらいなんですけれども、常に子どものケアの専門職が図書館にいるようになっているんですね。

またこの図書館は、一番奥に薬物依存症のクリニックがあります。多様な年代の人々が訪れる図書館に依存症のクリニックを置くということ自体、非常に実験的で、まだ症状が強い人も患者として来院してくるのですけれども、とにかくいろんな人がこの図書館にやってくるということになります。

ここは音楽コーナーで、この扉の奥にはスタジオがあって、音楽の創作ができるようになっています(図表20)。実は、スタジオを出てすぐのところにはミニステージがあるので、創った音楽をそのまま演奏して、みんなに披露するみたいなことも可能です。先ほどお話しした四空間モデルのなかのまさに「創作空間」になっています。

創作といえば、今は大きい図書館だと3Dプリンターを置いたものづくりのための空間「メーカースペース」があって、そこでフィギュアを作ったり、ちょっと特別な機械は必要になりますけれども、Tシャツをつくったり、布を織ったり、いろいろな創作活動をする、そういう場所になっています(図表21)。ちなみに、自宅で使うための工具を借りたりすることもできます。

この写真は、若者のためのスペースですが、イソオメナ図書館には若者のためのスペースが三つもあります(図表22)。「コックピット

(図表19) 子ども用のコンピューターコーナー



(資料) 吉田右子氏撮影

(図表20) 館内にある本格的な音楽スタジオ



(資料) 吉田右子氏撮影

(図表21) メーカースペース・コーナー



(資料) 吉田右子氏撮影

ト」と名付けられたいわゆる就労支援コーナーには専門のカウンセラーが常駐して、若者の進学、就職や生活にかかわる相談に乗っています。それ以外にも、とくに目的なくただ滞在できる場所などもあり、そこにもカウンセラーがいます。

次に紹介する「カッリオ図書館（Kallion kirjasto）」もフィンランドの図書館なんですけれども、今までの二つがどちらかという新しい図書館であるのに対して、こちらの図書館は建てられて100年という、歴史ある図書館です。地域的にも特色があるところで、かつては低所得者のための住宅がたくさんあったそうですが、今は若者に非常に人気のエリアになっています。この図書館で子育て関係のおもしろい試みがありましたので、ご紹介しておきたいと思います。

ここは児童室なんですけれども、ベビーカーがたくさん見えます（図表23）。図書館に来る親子連れというのはすごく多いのですけれども、育休中の男性が絶対的に多いです。やっぱり図書館は親子連れで行きやすい場所なのかなと思います。

実は、このスペースの奥に小さなミーティングスペースがあって、そこで乳幼児を持つ保護者を対象に定期的に映画館を開催しているということです。赤ちゃんを添い寝をしながらとか好きな姿勢で映画観賞できるようになっていて、部屋には電子レンジ、キッチンセット、トイレも完備なので、映画館に行くことが難しいという人たちがここで映画を楽しめます。

この図書館は、フィンランドで初めて館内にLGBTコーナー「レインボー書架」を設けました（図表24）。「レインボー書架」コーナーはアクセスしやすいのだけれども、ちょっとだけ奥まったところであって、LGBT関係のいろいろな本が置いてあります。もちろん、大人向けの本もあれば、マンガもあれば、児童書もあるし、

（図表22）若者が自由に過ごせるスペース



（資料）吉田右子氏撮影

（図表23）ベビーカーが並ぶ児童室



（資料）吉田右子氏撮影

（図表24）LGBTコーナー「レインボー書架」



（資料）吉田右子氏撮影

視聴覚資料、映画もあります。基本的に北欧諸国では同性婚が認められていますし、多様な性的指向に寛容な地域です。図書館を出たすぐの公園のキヨスクにレインボーフラッグが立っていたりして、この地域全体がLGBTにフレンドリーな地域であるということも言えるのかもしれません。それでもLGBTに対してさらに寛容な社会にするために図書館が貢献できることを考えて「レインボー書架」をつくったのだそうです。

これは閲覧室の壁を写した写真ですけれども、図書館は無料でアーティストに壁面を貸し出しています(図表25)。多くの若い芸術家は経済的に困難な状況にあります。画廊で自分の作品を展示しようとするのが高額な費用がかかりますが、図書館は無料です。作品にはQRコードがついているので、アーティストにすぐコンタクトがとれるようになっています。こういうふうな壁面でアーティスト支援というのは非常に図書館らしいなという感じがします。

北欧では保育園児のときに公共図書館との出会いがあるんです。北欧諸国ではほぼ100%共働きなので、1歳ぐらいから保育園に入りますよね。そうすると、保育園の日課のなかで、図書館に行く時間があります。あるいは司書が保育園を訪れます。そして小学校以降になっても、国語とか、社会とか、そういう科目に図書館訪問の時間が組み込まれています。学校の先生ともよく連携がとれていて、段階的に図書館が使えるような教育を保育園のときから小学校・中学校にかけて切れ目なく実施しています。例えばデンマークですと、通常2、3回は職を変えようと思うのですが、無職になったときにまず思い浮かぶのが「職探しの中に、図書館に行ってみようかな」ということだし、引退したら「歩けなくなるまで図書館に行こう」ということだし、多分、一生のなかで恐らくずっと身近にあるのが地元の公共図書館なのではないかと感じます。それは、多分、子どものときに図書館に行く習慣がついているからではないでしょうか。

7. 文化的な不平等を埋める空間

ところで、フィンランドでは「育児パッケージ (Äitiyspakkaus)」と呼ばれる、妊婦のためのサポートがあります。妊娠が分かると、育児パッケージあるいは現金を受け取ることができますが、圧倒的多数の人が、育児パッケージのほうを選択すると聞きました。食料品を除いて、赤ちゃんが生まれてから1年間、このパッケージだけで過ごせるようになっています(図表26)。

このなかには60点ぐらいぎっしりと子育てに必要な物が入っていて、キャッチフレーズは「生まれた瞬間から平等に」。北欧では平等という理念が何をする場合でも最優先。そのことは北欧社会で公共図書館が非常に成熟していることとも深い関係があるのではないかと、と育児パッケージの仕組みをみて確信しました。育児パッケージに含まれるアイテムは、本当に厳選に厳選を重ねて選ばれていますがその

(図表25) アーティストが自作を展示するコーナー



(資料) 吉田右子氏撮影

なかには、やはり絵本がありました。本は生きていくうえでなくてはならないものだとして認識されていたので、その60点のなかに入ったのかなと思います。

北欧に限らず、アメリカでも、日本でも、世界中どこでも、図書館という場の共通理念になりますが、文化的な不平等を埋める空間、それが図書館です。文化的に不平等な立場に置かれた人たちを文化的に包摂する、そういう機関が図書館である、これが図書館の原則なんですね。この原則はどの国にもあるんですけども、この原則に忠実に従ってサービスを提供し、それを成功させているのが北欧の公共図書館だと思います。

先ほど、コンピューターゲームの話をしました。最初は図書館にゲームが置かれていることに本当に驚きました。ですから「なぜゲームを置くんですか」と、図書館に行くたびに司書に聞いて回ったんですけども、10館ほど回ったときに、あまりにも答えがワンパターンなので、もう聞くのをやめたんです。本当に判で押したように同じ回答でした。

1点目は、コンピューターゲームもメディアの一種である。図書館では娯楽的な本から学術書まで幅広く多様な文化にアクセスできるようにしている。だから図書館には図書もあれば、雑誌、レコード、CDもDVDもあるし、コンピューターゲームもある。それは本当にごく普通のことですよという回答です。

2点目は、コンピューターゲームを持っている子どもと持っていない子どもがいる。持っていない子のほとんどが難民ですが、あるメディアを持っている子どもと持っていない子どもがいるというのは、文化的な不平等である。文化的な不平等を埋めるのは図書館をおいてほかにないという回答です。この二つの回答がセットで、どこの図書館でも瞬時に返ってくるんですね。これはすごいなと思いました。

今はゲームの例を出しましたがけれども、すべてのサービスにわたってそういう考え方が徹底していると思います。この写真に写っている女の子たちは私がよく行っていた図書館の常連の子たちです（図表27）。2時頃学校から直接図書館に来たら、もう閉館まで帰らないんですね。なぜかという図書館ですべてのことができる

（図表26）子育てに必要なアイテムがぎっしりと入った育児パッケージ



（資料）吉田右子氏撮影

（図表27）図書館で放課後を過ごす少女たち



（資料）吉田右子氏撮影

からです。ランチを食べたり、宿題したり、コンピューターゲームをしたり、電話で友だちとおしゃべりしたり、図書館などにかくすべてのことをしてしまうのです。それぞれ小学校1年生の頃から中学卒業するまでずっと放課後を図書館で過ごしている子どももいて、ほとんど図書館の住人ですね。もちろん、こうしたヘビーユーザの子どもたちは、司書とも大の仲良しです。

図書館に長時間滞在する子どもの大部分は難民です。いわゆるデンマークネイティブの子たちは、放課後に習い事をするケースが多いんですね。乗馬を習ったり、サッカーを習ったりして。でも習い事にはお金がかかりますよね。難民の子どもたちは両親が経済的に厳しくて習い事ができない、あるいはショッピングモールなどに行くことを両親が禁じていたりして、結局、その子たちの放課後の居場所として選択肢に残るのは、地元の公共図書館しかないのです。もし図書館でおしゃべりが禁じられ飲食もできない場所だったら多分、この子たちは図書館で長い時間を過ごすことはないと思います。

図書館には宿題をサポートしてくれるボランティアがいて勉強を手伝ってくれたりするので、到底、諦めていた大学進学を放課後の公共図書館通いで達成した子どもが何人もいます（図表28）。両親が一生懸命働いている間に図書館が子育てをバックアップしている、北欧の図書館はそういう場になっています。

難民にとって図書館はとにかくハードルが高いし、難民キャンプで生まれたら図書館そのものの存在を知らない場合もあり得ます。ですから北欧の図書館界では1980年代からすでに「図書館というのはこういうところなんです、何でもしたいことをしていいし、お金も取らないし、誰も何も言わないんですよ、とにかく来館者を

みんな平等に歓迎します」という姿勢を繰り返し見せてきた結果が、現在の公共図書館の利用者増に反映しています。北欧で午後に図書館に行くと難民の利用者がたくさんいて、そして思い思いの方法で図書館での時間を過ごしているのです。

8. 日本の公共図書館の課題

日本でも子育て支援にかかわる図書館が増えてきました。文部科学省が全国の図書館の先進事例をまとめたページを公開しています（注2）。

冒頭で日本の図書館が静かであることを強調しましたが、児童室だけは例外でおしゃべりを認めている図書館が多いのです。児童室で子どもたちに「静かに」と注文するのは無理な話ですよ。児童室だけはどの図書館でもにぎやかですので、私はそこから日本の図書館がおしゃべりのできる場所が変わ

（図表28）放課後の図書館で開かれる難民の子どもを対象とした宿題カフェ



（資料）Helle Andresen氏写真提供

（注2）https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/mext_01041.html

っていけばいいなあと思ったりもしています。

また、学校図書館も今日紹介した北欧の公共図書館のようにぎやかでフレキシブルな空間を持つ場所になっているところが増えています。大学図書館でも大きな変化が起こりつつあります。ラーニング・コモンズという学習やコミュニケーションのためのスペースを置く図書館が増えています。筑波大学も「ラーニングスクエア」と呼ばれるフレキシブルな活動ができる一角では飲食やおしゃべりが許されています。

こうした学校図書館や大学図書館を経験した人たちは、図書館で飲食したりおしゃべりしたりすることに全然抵抗を感じない。そういう人たちが来館してごく自然ににぎやかに過ごすようになれば、公共図書館は確実に変わると思うんです。

図書館設置率の格差も大きな問題です。北欧は法律ですべての基礎自治体に図書館を置くということが決まっているので、図書館がない自治体は存在しません。日本は町村自治体の図書館設置率が57%ぐらいに止まっています。地域による図書館格差は大きな課題です。さらに図書館間の施設の差もかなりあります。コストがかかりすぎるので、最近はおとんどの場合、図書館単体ではなく複合施設のなかに図書館が設置されるようになりました。そうした新築の複合施設は、今日ご紹介した北欧のような多目的な空間と多様なサービスを実現しています。問題は、かなり古びてしまった既存の公民館、地域センター、図書館施設をどうしていくのかです。とくに公民館の図書室が気になっています。というのも公共図書館のない地域の人たちは、そこを公共図書館として使っています。公民館図書室は図書館法で定められた図書館ではありませんが、利用者にとっては公共図書館そのものなんですよ。老朽化した全国の生涯学習施設を対象に、北欧図書館型リノベーションを手掛ける専門家が出現したら、日本の静かな図書館はすごく変わっていくのではないのでしょうか。

ところで、日本固有の大変ユニークな施設である公民館ですが、図書館とは異なり人と人との交流がプログラムの主体です。なかには他者との会話が苦手な人もいます。人とかかわりたいけれども積極的に活動することはむずかしい、そういう子どももたくさんいると思います。そういう子どもたちにとって、図書館は救済の場所として機能します。保健室登校と呼ばれる状況がありますが、類似した役割は公共図書館にも求められると思います。図書館で助けられた経験をした人が司書を目指すケースはたくさんあります。

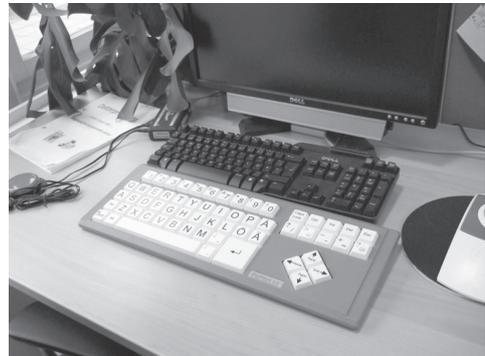
最後に、障害のある子どもと図書館についてですが、基本的に図書館というのは、知識と情報に対するアクセスを保障する空間なので、どの国であっても図書館の優先事項の1番最初にくるのはアクセスしにくい人、アクセスが困難な人に対してどのように到達できるのか、ということです。日本の図書館でも多様な障害に合わせて資料を用意したり、アクセスの方法を工夫したり、適切なサービスを提供しています。問題は図書館ではすでに障害のある人々を迎え入れる準備ができていのに、図書館がそうした準備を整えた施設であることをほとんどの人が知らないということです。そこが一番問題だと思います。

北欧では障害者への図書館サービスが進んでいるというよりは、北欧の国自体が完全にユニバーサルサービスの考え方に則って、社会が出来上がっている印象があります（図表29）。例えば車椅子の子どもが友だちと砂遊びができるように、砂場の高さを上げたりとか、そういう発想が社会全体に浸透しか

つインフラが整備されています。そういう意味においては、北欧のほうが図書館における障害者サービスが進んでいるのかもしれませんが。

あともう一つ重要なのは、北欧では国立図書館がすべての責任を持って障害のある利用者にサービスをしています。日本では、障害者、とくに視覚障害者への図書館サービスを私立図書館が担ってきたという歴史があります。もちろん国立国会図書館も様々な障害者サービスを実施しています。それでも障害者のための独立した国立図書館があるかどうかは、大きい違いではないかと考えています。

(図表29) 館内に設置された通常のキーボードが打ちにくい人用のコンピューター



(資料) 吉田右子氏撮影

○吉田 右子（よしだ ゆうこ）氏 ご経歴

筑波大学図書館情報メディア系教授。博士（教育学）。専門は公共図書館論。主な著作に『メディアとしての図書館』『デンマークのにぎやかな公共図書館』『オランダの公共図書館の挑戦』『読書を支えるスウェーデンの公共図書館』（共著）『文化を育むノルウェーの図書館』（共著）『フィンランド公共図書館』（共著）。2008年8月から2009年3月までデンマーク王立情報学アカデミー客員研究員。